

Title	移民受け入れ国となったスペイン：「後発性の利益」と「地域主義」の間で
Sub Title	Spain as an immigration receiving country : between latecomer advantage and regionalism
Author	深澤, 晴奈(Fukasawa, Haruna)
Publisher	
Publication year	2023
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2022.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本研究では、移民受け入れ後発国であったスペインが、大規模な移民流入から今日までの20年間に辿ってきた移民政策の変遷と市民社会の反応を分析し、とくに移民の社会統合政策において、「後発性の利益」を享受しつつ、地域主義が顕著である等の様々な状況の国内政治の中でいかに市民社会が移民流入を受容してきたかについて検討することができた。</p> <p>This study analyzes the changes in the immigration policy of Spain as a latecomer to receiving immigrants and the reaction of the Spanish civil society over the past 20 years that saw a large-scale influx of immigrants. Through this study it was found that the Spanish civil society has accepted the influx of immigrants in various situations of domestic politics such as having prominent regionalism while enjoying several advantages of latecomers.</p>
Notes	<p>研究種目：若手研究 研究期間：2018～2022 課題番号：18K18245 研究分野：スペイン現代政治・社会</p>
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_18K18245seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32612

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K18245

研究課題名（和文）移民受け入れ国となったスペイン：「後発性の利益」と「地域主義」の間で

研究課題名（英文）Spain as an Immigration Receiving Country: Between Latecomer Advantage and Regionalism

研究代表者

深澤 晴奈（FUKASAWA, Haruna）

慶應義塾大学・商学部（日吉）・講師

研究者番号：90761429

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、移民受け入れ後発国であったスペインが、大規模な移民流入から今日までの20年間に辿ってきた移民政策の変遷と市民社会の反応を分析し、とくに移民の社会統合政策において、「後発性の利益」を享受しつつ、地域主義が顕著である等の様々な状況の国内政治の中でいかに市民社会が移民流入を受容してきたかについて検討することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

21世紀の移民受け入れ後発国が、グローバルな経済状況や近隣諸国との関係性ととも、市民社会の自律や地域主義の高揚といった国内政治情勢のなかで独自の政治的バランスをとりながら移民の社会統合政策を推進してきた過程を分析することができた。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes the changes in the immigration policy of Spain as a latecomer to receiving immigrants and the reaction of the Spanish civil society over the past 20 years that saw a large-scale influx of immigrants. Through this study it was found that the Spanish civil society has accepted the influx of immigrants in various situations of domestic politics such as having prominent regionalism while enjoying several advantages of latecomers.

研究分野：スペイン現代政治・社会

キーワード：移民政策 スペイン 市民社会 地域主義

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

経済のグローバリゼーションの進展とともに、現代国家は、移民について、経済面ではより国境を開放することが求められる一方で、政治や法制度面ではより国境を厳格に管理することを要求されるというジレンマを抱えている。すでに 20 世紀末までに、ホリフィールド、サッセン、カースルズなどをはじめとした多くの研究者によって、移民流入が「脅威」と捉えられると諸国家の移民政策はより規制的になることが指摘されてきた (Hollifield, *Immigrants, Market, and States*; Saskia Sassen, *Losing Control? Sovereignty in an Age of Globalization* (New York: Columbia University Press, 1996); Stephen Castles, “International Migration at the Beginning of the Twenty-first Century: Global Trends and Issues,” *International Social Science Journal* 52, no.165 (2000): 269-281)。だが、これに反して、現代国家は、福祉の維持やグローバル競争のなかで移民を必要としている。したがって、ゾルバーグが述べるように、資本主義・民主主義国家は移民の受け入れを選択する傾向にあるだろう (Aristide R. Zolberg, “The Next Waves: Migration Theory for a Changing World,” *International Migration Review* 23, no. 3 (1989): 403-430)。そうしたなかで、国家は、よりリベラルな経済政策とより厳格な移民管理という相反しながらも共存する政策を採る方向に向かっている。こうしたなか、本研究では、新たな国際分業体制が形成され国際労働力移動における二重のグローバル化が定着した時代に移民受け入れ国となったスペインにおいて、どのような移民政策が採られてきたのかに着目した。

2. 研究の目的

本課題研究者は、これまで進めてきた研究から、スペインにおいては、「後発性の利益」と「地域主義」が上記の現象を考える際のキーワードとなるのではないかと考えるに至った。20 世紀後半における他ヨーロッパ諸国の移民政策をうかがいながら、「移民は帰国せずに定着する」ことをはじめとする多くを「後発性の利益」を伴って学習し、それらを政策に取り入れながら短期間に政策が整えられてきたためである。それは入国管理政策だけではなく社会統合政策にも及んでいると考えられる。本研究では、その内在的・外在的要因を探るために、「後発性の利益」を縦軸、「地域主義」を横軸に置き、その間にある関連する他の諸要素について検討し、スペインでは独自の政治的バランスを伴った移民受け入れ状況が形成されているのかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

本課題研究では、上述の分析から抽出された要素の状況下にある移民受け入れ社会の認識構造を検討するために、歴史学、国際関係、政治学、社会学の学術的営みを踏まえながらも、地域研究として、ヨーロッパ地域のなかでのスペインの位置付けとともに、スペイン国内の各自治州の例を取り上げながら国内における空間的な比較を含む分析を試みた。具体的には、各地方レベルでどのような移民政策の差異が存在し、それぞれ何を目的としているのかについて、全国に 17 州ある自治州のうち首都及び地方主義の特徴を有する 4 州 (マドリード州、カタルーニャ州、アンダルシア州、バスク州) を取り上げた。その際には、まず Godenau, Rincken, Martínez de Lizarrondo Artola をはじめとしたスペイン国内における研究成果を踏まえて、アクチュアルな現状把握に努めた (Godenau, Dirk; Rincken, Sebastian; Martínez de Lizarrondo Artola, Antidio; Moreno Márquez, Gorka, *La integración de los inmigrantes en España: una*

propuesta de medición a escala regional, Madrid, Ministerio de Empleo y Seguridad Social, 2014; Rincken, Sebastian; Trujillo-Carmona, Manuel, “The ‘intergroup paradox’ in Andalusia (Spain): an explanatory model”, *Journal of Ethnic and Migration Studies*, Routledge, 2017 等)。とくにスペイン移民政策の位置付けや地方自治体における社会統合政策に関する文献や一次史料を収集し、移民受け入れ社会の置かれた状況を把握し、それらの史料から地方主義の要素を抽出して各地方の実態把握をおこなった。また、本研究課題は現在進行形のテーマであることから、現地での資料収集や聞き取り調査をおこなうことが必須であった。本研究期間の前半と最終盤には、現地に赴いてスペイン国立図書館や学術機関などで調査をした他、移民政策策定関係者へのインタビュー調査をおこなうことができたが、研究期間中盤は新型コロナウイルス流行の影響により現地調査が不可能な期間もあった。その時期には、インターネット上での資料収集に加えて、オンラインによるインタビュー調査を実施した。

4. 研究成果

本課題研究では、移民受け入れ後発国であったスペインが、大規模な移民流入から今日までの20年間に辿ってきた移民政策の変遷と市民社会の反応を分析し、とくに移民の社会統合政策において、「後発性の利益」を享受しつつ、いかに市民社会が移民流入を受容してきたか、そして時にバックラッシュを経験するに至ったのかについて検討を進めた。同時に、経済状況の変化、民主化後の政治情勢や市民社会の自律といった国内政治の中で独自の政治的バランスを伴ってきた移民受け入れ状況、地域主義が顕著である自治州における社会統合政策、EU や近隣諸国との関係性における移民政策の策定過程なども念頭に検討した。

そうしたなか、本課題研究開始以降の2010年代末には、極右ポピュリスト政党が一定の支持を得て国政に進出することとなった。同党は主に目下国内で争点となっていた地域主義(とくにカタルーニャ主義)に対抗する反地域主義を掲げて票田を獲得していったが、同時に、自国民の富を横取りする非正規移民といった言い回しやムスリムに対する排斥の言説など、反移民を唱えることにも力を入れた。同党の支持層が数パーセントとはいえ徐々に拡大したことで、これは一見、極右反移民政党の出現とも捉えられがちであるが、これもまた、まずは中央政府と地域主義の対立が顕在化した現象であると言えるだろう。こうしたことから、本研究では、国内での地域主義過熱の影響とそれに対抗する国家ナショナリズムを掲げて存在感を増すに至った極右勢力の動向を分析することで、それまで相対的に抑制されてきた移民排斥の言説が以前より顕在化している可能性にも注視した。その際には、低学歴や低所得もしくは失業中の社会的弱者が経済的理由から移民に反感を抱くという一般的なストーリーから反転し、学歴や所得においては中間層でとくに失業中ではない層が排外的な極右政党を支持する傾向についても、新たな検討事項とすることができた。

また、スペインではとくにコロナウイルス感染症による犠牲者が多く感染拡大も深刻だったこともあり、本研研究期間後半には、移民や人の移動に関する全般的な政策についての長期的な立案などの動きは見られなかった。他方で、感染症拡大によって人の移動や移民研究についてあらためて問われることにもなり、今後の研究対象が拡大するきっかけになったとも考えている。コロナ禍と移民政策については、2022年開催の第10回スペイン移民学会(Congreso de Migraciones)での報告準備に向けた現地の研究者との議論や学会参加を通じて、最新情報を得つつ順次現地の様子をアップデートすることができた。政治的決断が膠着しているなかでも中央政府と地域主義の対立は様々なかたちであらわになっており、そこに移民政策の議論が出現することからも、本研究課題は今後も注視すべきテーマであることに変わりはないと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 深澤晴奈	4. 巻 -
2. 論文標題 「移民受け入れ国となったスペイン（1985年-2011年）-移民政策決定過程における市民社会の対応を軸として」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 博士学位論文、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Haruna Fukasawa
2. 発表標題 Immigration as a Changing Social Factor: The case of Spain
3. 学会等名 IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences)2020年度大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深澤晴奈
2. 発表標題 España y Japon, un “problema” y dos realidades（スペインと日本：1つの「問題」と2つの現実）
3. 学会等名 スペイン移民学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深澤晴奈
2. 発表標題 ラテンアメリカからスペインへ：家事労働分野における女性移民労働者
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深澤晴奈
2. 発表標題 「スペインにおける外国人労働者の流入と受け入れ社会：2000年代におけるマドリード、カタルーニャ、アンダルシアの比較を通じて」
3. 学会等名 スペイン史学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 松久玲子編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 270
3. 書名 『国境を越えるラテンアメリカの女性たち：ジェンダーの視点から見た国際労働移動の諸相』	

1. 著者名 小谷眞男・横田正顕編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 430
3. 書名 『新・世界の社会福祉 第4巻 南欧』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------